

第2分科会記録

自閉症のある子供の自立活動を組み立てる上での要点－実態から子供につけたい力（目標）を考える－

司会者

村井 敬太郎（国立特別支援教育総合研究所）

話題提供者

趣旨説明

柳澤 亜希子（国立特別支援教育総合研究所）

研究報告1「特別支援学級における自立活動の指導の現状と課題－アンケート調査から－」

西村 崇宏（国立特別支援教育総合研究所）

研究報告2「自閉症のある子供の自立活動の授業を組み立てる上での要点」

柳澤 亜希子（国立特別支援教育総合研究所）

実践報告1「小学校自閉症・情緒障害特別支援学級での実践」

金子 道子（千葉県我孫子市立我孫子第二小学校）

実践報告2「中学校自閉症・情緒障害特別支援学級での実践」

荒谷 美巳（広島県安芸郡坂町立坂中学校）

指定討論

野呂 文行（筑波大学）

第2分科会では、まず柳澤主任研究員より、本分科会の趣旨と研究の概要について説明がなされた。

前半の研究報告では、西村研究員と柳澤主任研究員より報告がなされた。西村研究員からは、「特別支援学級における自立活動の指導の現状と課題」に関するアンケート調査結果の概要について報告がなされた。本調査の結果を踏まえて、「担当者の自立活動に関する理解促進の重要性」、「自立活動の指導計画と指導目標の設定の重要性」、「自閉症のある児童生徒の困難さに対応した指導とともに、自己を肯定的に捉えることができる指導の重要性」、「教師による指導の振り返りの必要性と、児童生徒による自己評価の重要性」が示された。柳澤主任研究員より、「自閉症のある子供の自立活動の授業を組み立てる上での要点」の概要について説明がなされ、「個々の子供につけたい力（目標）の絞り込み」（要点1～3）を中心に、自閉症のある子供の实態把握や指導目標の設定における留意点、「指導の振り返りの重要性」（要点9）について解説がなされた。

後半の実践報告では、金子氏と荒谷氏より自閉症・情緒障害特別支援学級での自立活動の時間における指導について報告がなされた。金子氏からは、小学校での実践（単元名「友だちと一緒に行動しよう」）として、2年男児の交流学級での活動場面における課題（友達の意見の相違に気づく、一緒に行動するための約束事を理解する）に基づいた自立活動の指導の目標設定と本授業での取組が報告された。荒谷氏からは、中学校での実践（困った状況時に相手に尋ねることを目指した「福笑い」による指導）として、2年生徒に対し、本生徒の得意なゲームを導入し、ゲームでの役割を通してわからないことや困ったことを自分から尋ねたり、相手からの質問に回答したりすることを目指した指導について報告がなされた。

（以上、要項 P46－68 参照）

<指定討論>

野呂氏より、両氏の実践に対して以下のことが述べられた。金子氏の実践については、本児が他児との

意見の相違に気づくことから指導をスタートしたこと、また、本人の友達と一緒に行動したいが、わがままを言ってしまったという課題を受けて、それへの指導の必要性を踏まえて指導を行ったことが見習うべき点であるとのことであった。これについて、金子氏からは、小集団を編成して「個別の目標」を立て、それに迫る授業作りに取り組んだこと、対象児童には「自分の意見を言いつつ、友だちの意見も尊重しよう」ということを大切にして指導したとのことであった。荒谷氏の実践については、日常場面で助けを求めることができない本生徒に対して、ゲーム（福笑い）という非日常の中で役割を与えて指導を行ったことは、ゲームを教材としてどのように使うかという点で参考になる実践であったと述べられた。これに対して、荒谷氏からは、本生徒にとって「自分から尋ねること」の必然性が大切であり、そうした設定をするためには、的確な実態把握が重要であると述べられた。

<全体協議（参加者からの質疑応答）>

質問者：小学校で自閉症・情緒障害特別支援学級を担任している。自立活動の指導を週の時間割に設定すると、各教科の指導の時数を減らさなくてはならない。各教科の時数を減らすことは難しいため、自立活動の指導は不定期に行っている。自立活動の時間を設定する際に工夫していることはあるか。

金子氏：自立活動を時間に位置づけて設定しないと、自立活動の指導を「やらない」という状況になりやすい。自立活動の時間における指導の内容や重要性について保護者に十分に理解してもらい、時間を設定するようにしている。

荒谷氏：教科の内容を精選することで各教科の時数を減らし、自立活動の時間における指導にあてている。

質問者：特別支援学級を設置している小学校の校長である。個別に指導する際には、個に応じた目標と指導内容を設定することは可能だが、学級として集団で授業をする際には、全体目標と個人目標のすり合わせが難しい。具体的な工夫について教えてほしい。

金子氏：課題が近い3人の児童で小集団を編成し、自立活動の授業を行った。それぞれの児童の課題は一見、似ていても異なる。個人目標を設定することで、それぞれの児童が主体的に、やる気をもって学習に取り組めるようになった。また、指導の際には、教師が「本人のつぶやき」をしっかり受け止めるように努めた。そのことで、教師が児童一人一人の新たな課題に気づき、集団の中で個に応じた指導の目標を明確にすることができた。

荒谷氏：集団の目標を設定した際、「この生徒には、ここまでさせよう」という個別目標を設定するようにしている。例えば、生活単元学習においても、単元の全体目標が「発表する」とした場合、それぞれの生徒の個々の到達目標、例えば生徒によっては「自分で考えて文書に書いて発表する」、「ワークシートを活用して内容を整理して発表する」というように設定している。

<まとめ>

柳澤主任研究員より、本研究を通して、自閉症のある児童生徒の実態把握から指導目標を設定することの難しさとその重要性をあらためて確認したと述べられた。今後も自閉症のある児童生徒の的確な実態把握に基づいた課題の整理と指導目標設定に焦点を当てた研究を行い、自閉症のある児童生徒の指導の参考となる情報を提供していきたいと述べられた。